

日本英文学会関東支部
第 15 回（2017 年度秋季大会）
プログラム

日時： 2017 年 10 月 28 日（土）

会場：中央大学後楽園キャンパス

〒112-8551 東京都文京区春日 1-13-27

アクセス

東京メトロ丸ノ内線・南北線『後楽園駅』から徒歩約 5 分

都営三田線・大江戸線『春日駅』から徒歩約 6 分

JR 中央・総武線『水道橋駅』から徒歩約 12 分

JR 中央・総武線『飯田橋駅』から徒歩約 17 分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail:kanto@elsj.org

12:35 	<p style="text-align: center;">開場・受付開始 (受付:6号館4階廊下、発表者控室:6418教室) *13:55以降の受付は5号館3階ロビーへ</p>		
12:50 13:10	<p style="text-align: center;">総会 6号館3階 6325教室</p>		
<p style="text-align: center;">研究発表 6号館4階</p> <p style="text-align: center;">13:20 14:00</p>	<p style="text-align: center;">第1会場 6413教室</p>	<p style="text-align: center;">第2会場 6417教室</p>	<p style="text-align: center;">第3会場 6421教室</p>
	<p style="text-align: center;">アガペーのゆらぎ ——ロレンス・スターン 『ブラーミンの日記の続き』 (1767)と hobby horse (発表) 久保田 裕紀 (司会) 吉田 直希</p>	<p style="text-align: center;">初期近代演劇における 寡婦表象と喪服の意味の 多層性 (発表) 木村 明日香 (司会) 米谷 郁子</p>	<p style="text-align: center;">“Billy Budd, Sailor”における 吃音——晩年の Melville が 遺した筆の震え (発表) 板垣 真任 (司会) 佐久間 みかよ</p>
<p style="text-align: center;">シンポジウム 5号館3階</p> <p style="text-align: center;">14:10 16:10</p>	<p style="text-align: center;">メインシンポジウム 5334教室</p>	<p style="text-align: center;">イギリス文学部門 5333教室</p>	<p style="text-align: center;">言語・教育部門 5335教室</p>
	<p style="text-align: center;">英米文学と日本語 (司会・講師) 後藤 和彦 (講師) 中村 和恵 森 慎一郎 加藤 光也</p>	<p style="text-align: center;">イギリス・アメリカ文学史 補遺2——18世紀の詩 (司会・講師) 富樫 剛 (講師) 海老澤 豊 小泉 由美子 西山 徹</p>	<p style="text-align: center;">Curriculum Amendment in a University-Level English Language Program: Theory and Practice (司会) 山本 有香 (講師) 齋藤 雪絵 Corazon Talam Kato 横本 勝也</p>
<p style="text-align: center;">特別講演 5号館3階</p> <p style="text-align: center;">16:20 17:50</p>	<p style="text-align: center;">5336教室</p> <p style="text-align: center;">Lost in the Detail: Edgar Allan Poe’s “Murders in the Rue Morgue” (講師) D.A. Miller (司会) 田尻 芳樹</p>		
18:00 20:00	<p style="text-align: center;">懇親会 5号館地下食堂</p>		

開場・受付開始(12:35より 6号館4階廊下にて)

13:20-14:00

【研究発表】

第1会場(6号館4階6413教室)

アガペーのゆらぎ——ロレンス・スターン『ブラーミンの日記の続き』(1767)と hobby horse

(発表者) 慶應義塾大学後期博士課程 久保田 裕紀

(司会) 成城大学教授 吉田 直希

Laurence Sterneによる自伝的小品 *Continuation of the Bramine's Journal* (1767)は、愛人との交換日記を意図して書かれている。本作品では、現在はやむを得ず別離している Eliza との精神的な愛、来るべき至福の生活が聖書の語彙を用いて描かれる。特定分野の語彙によって恋愛を描く Sterne の書きぶりは *The Life and Opinions of Tristram Shandy* (1759-67)にもみられ、恋愛の基調をなす特殊な語彙は各個人の hobby horse(熱狂的な関心)に由来するとされる。とはいえ後者で描かれるのは、高度な特殊性をもたらすその人物の意思疎通の失敗である。恋愛のための特殊な表現の元となっている hobby horse に着目するとき、前者における恋愛の記述にはどのような特徴があるだろうか。本発表では、聖書の語彙に彩られた Eliza との愛にただよう不穏さを、hobby horse という心理的概念との関係において考察したい。

第2会場(6号館4階6417教室)

初期近代演劇における寡婦表象と喪服の意味の多層性

(発表者) 東京大学助教 木村 明日香

(司会) 清泉女子大学准教授 米谷 郁子

初期近代に執筆・上演された戯曲における寡婦の表象を、当時の劇場の物質的条件のうち、衣装(特に喪服)に注目して考察する。近年シェイクスピア作品をはじめとする初期近代の戯曲が当時の劇場でどのように上演されたかを三次元的に想像する試みが盛んであり、こうした論考の中には女性表象に注目したものも多いが、本発表ではこうした動向を踏まえ、寡婦という両義性に満ちた存在が、どのように舞台上で表象されたかを論じる。具体的にはまず初期近代イギリスにおいて寡婦が生と死、女性性と男性性、貞節とセクシュアリティといった複数の意味合いにおいて両義性をはらんだ存在であったことを指摘し、こうした両義性あるいは曖昧性が舞台上でどう表象されたかを、当時の戯曲で寡婦が頻繁に結びつけられるオブジェクトのひとつである喪服の社会的・文化的・象徴的意味の多層性と絡めて論じる。

第3会場(6号館4階6421教室)

“Billy Budd, Sailor”における吃音——晩年の Melville が遺した筆の震え

(発表者) 成蹊大学博士後期課程 板垣 真任

(司会) 和洋女子大学教授 佐久間 みかよ

Herman Melville の遺稿“Billy Budd, Sailor” (1924)の決定版を編集した Harrison Hayford と Merton M. Sealts, Jr は、ビリーの organic hesitancy を *White-Jacket* などにも見られる「メルヴィルらしい」表現と呼んでいる。一方で編者は晩年の Melville が約 20 年ぶりの散文執筆の過程で、幾度も稿を改めた軌跡を明らかにしている。Melville にとって、身体の障害を負う者は自分に馴染みのある題材だったが、最期には扱うのに難しいテーマと化していたのである。

“BB”におけるビリーの身体的な瑕疵とは、吃音に他ならない。実際に Melville が吃音を書いている箇所を見てみると、“D-D-damme”のように吃音が視覚化されて表現されている箇所は存在する。ところがそのような表現が書かれているのは第 14 章のみである。Melville はその他の箇所でいかに吃音を描き損ねたのだろうか。Melville の筆の揺らぎは彼自身の吃音だったと言い換えてみたい。たとえば、第 19 章はビリーが失語の末に殺人に至る物語のクライマックスと呼べるが、そこに書かれていることは本当にビリー自身の吃音なのだろうか？

14:10-16:10 (5号館3階5334教室)

【メインシンポジウム】

英米文学と日本語

(司会・講師) 東京大学教授 後藤 和彦

(講師) 明治大学教授 中村 和恵

(講師) 京都大学准教授 森 慎一郎

(講師) 駒澤大学教授 加藤 光也

近代とは人類普遍の時間の成立のことであり、結果、日本を含む後発近代国家に与えられた宿命は、自分たちのものであったためしのない「普遍語」を通じてしかその時間に参入できないことだ、と水村美苗さんの『日本語が亡びるとき』は言っていて、さらにその普遍語が複数存在する時代も終わり、「普遍語すなわち英語」時代の到来はもはや火を見るより明らかだと言葉を継いでいます。あの本の登場から約10年、我々の足元は実際に英語の炎に嘗めあげられつつあるのかもしれませんが。ところで我々はたまたま英語(文学)を生業とする日本人たちですが、「英語の時代」に我が世の春を謳歌するどころか、どんどん肩身が狭くなっているようにも感じられるのは、考えればおかしな話ではありませんか。とりあえず問題は、我々にはどうしようもなく日本語があり日本文学があるから一登壇者のおひとりの著書のタイトルを借りて申せば、我々は「日本語に生まれて」しまったから—ここに由来すると思えません。この「どうしようもなさ」についてももう一度考えてみたいと思います。

英語を飼い馴らす——世界文学としての英語圏文学を日本で講じる意義

中村 和恵

日本で英語を教えること、さらに英語による文学を教えることには、植民地や準植民地的言語文化を背景とする国・地域で同じことをするのは、別種の困難がある。英語を真剣に学ぶ必然性がない、生活の実感とはかけ離れたものだという学生が多い。移民や紛争や人種など英語圏で熱心に論じられている主題にも同様の違和感がしばしば表明される。その一方で、英語という道具が手に入れば日本人は世界中の人々と対等かつ有利にわたりあっているはずといういわば英語万能神話、そしてその底流にある明治以来の舶来もの賛美・西洋憧憬・社会進化論的文化文明観の名残り、「新しい」「使える」英語教育を求める声も絶えず、「使えない」英語教育の代表が旧来の文学書の講読であるという人もすくなくない。英文学という名のもとに、いま実際なにを誰にどう教えるべきなのか。英語圏各地の実態に言及しながら、「使える」英語とはなにか、生きた言語とはなにかを問い、パワフルに標準英語を飼い馴らすグローバルな物語を、日本語を介して講じる意義を提唱したい。

村上春樹訳『グレート・ギャツビー』を読む

森 慎一郎

村上春樹訳『グレート・ギャツビー』が出版されて十年余りが経つ。発表と同時に大きな話題になり、その後もさまざまに語られ評価されてきたこの翻訳書を、あらためて丁寧に読み検討してみたい。何をいさら、と言われると答えに窮するほかないが、少なくともこの訳業が「英米文学」と「日本語(文学)」の一つの興味深い交差点をなしているという(まずは自明な)事実をアリバイに、*The Great Gatsby* の愛読者として、また、ぼつぼつ翻訳も手掛けるようになった者として、かねがね心惹かれていたこの作業を行ってみたいと思う。文体、リズム、比喩やイメージの処理、その他細部の工夫などを通じて、原作に深い愛着を寄せる小説家の日本語はどのような *The Great Gatsby* 像を結んでみせているか。原作のどこに光を当て、どこを影に沈ませている(ように思える)か。こうした問いをなるべく丁寧に考えてみることで、本シンポジウムのテーマにささやかな光を投げかけられたらと思う。

「外人になってしまう」——戦後文学と「英語」の問題

後藤 和彦

少なくとも戦後以降、日本語の問題とはすなわち英語の問題だったと思う。なぜなら敗戦に続く文化価値の全面的再配置は、日本語に下支えされ、またそのうえに日本語を彫琢練磨してきた日本型美学の根を、アメリカ的な、あるいは英語的な土壌に移植するようなものだったからだ。戦後まもない志賀直哉翁の「日本語は今後フランス語にするがよろし」の提案が牧歌的にさえ聞こえるのは、志賀が「フランス語」と言い、「英語」とは言わなかったからだろう。だから小島信夫の『アメリカン・スクール』(1954年)で「日本人が外人みたいに英語を話すなんて、バカな。外人みたいに話せば外人になってしまう」と思う主人公伊佐を我々が嗤えたとすれば、「本当」のあられもなさを我々は嗤うのだ。日本の戦後文学がたどったのは、どれほど英語・アメリカ的なものへの馴致の旅だったのか。果たして裸足で駆け出していった日本のハック・フィン伊佐は今どこにいるのか。

丸谷才一の例から

加藤 光也

自分にとっての英米文学、自分にとっての日本語ということを考えるとき、一番身近なのは、授業で扱う英文テキストや、翻訳をおこなったり論考を書いたりするときの日本語ということになるが、いずれの場合にも、実際にはそのつど間に合わせで対応しているだけで、特に何か方針や原則めいたものがあるわけではない。話し言葉と書き言葉の違いなど、英語教育の場での問題についてはいくつか考えることもあるけれども、話が散漫になりそうである。

そこで、今回は具体的な例として、小説家、批評家であり、ジョイスの研究者でもあった丸谷才一の場合を取り上げてみたい。とくに翻訳の例と、評論集『6月16日の花火』を読むと、第二次大戦後の日本におけ

るジョイス受容の一つのあり方をたどることができるように思われるので、それを手がかりに、英米文学と翻訳と日本語(日本文学)の関わりについて考えてみたい。ほかの講演者の方の話とうまくかみ合えば、幸いである。

14:10-16:10 (5号館3階5333教室)

【英文学部門シンポジウム】

イギリス・アメリカ文学史補遺 2—18世紀の詩

(司会・講師) フェリス女学院大学教授 富樫 剛

(講師) 駿河台大学教授 海老澤 豊

(講師) 慶應義塾大学後期博士課程 小泉 由美子

(講師) 名城大学教授 西山 徹

Roger Lonsdaleによるオックスフォード版アンソロジー、David Fairerらによるブラックウェル版アンソロジーの高評価と人気から窺われるように、18世紀イギリス詩の形式的・内容的豊かさが認められるようになって久しいはずであるが、日本において、また18世紀以外を専門とするイギリス詩研究者間において、十分な理解が広がってきたとは言いがたい。この空白を埋めるべく、本シンポジウムではPope, Grayら従来より扱われることの比較的多かった詩人に加え、他の詩人たちの詩、また同時代のアメリカ詩をもとりあげ、18世紀イギリス・アメリカ詩の知られざる諸相を紹介したい。ギリシャ・ローマ古典やイタリア・フランスのルネサンス詩を受容しつつ宗教的・政治的動乱のなか独自の詩のありかたを探り展開した16-17世紀から、いわゆるロマン主義の隆盛を見た19世紀まで、どのような連続性あるいは断絶・新展開が見られるのか、関心と理解を深めるきっかけを提供できれば幸いである。

古典主義とは何か ——反ピューリタン言説から感受性の議論へ——

富樫 剛

古典主義(classicism)——ロマン主義との対立においてしばしば目にする言葉であるが、その文学史上の意義は正しく理解されているように思われない。OEDには "Conforming in style or composition to the rules or models of Greek and Latin antiquity" とあるが("classical" 6)、その初出例はByronがGoetheに宛てた手紙(1820)である。(新)古典主義の時代とみなされる18世紀の詩人たちは、実際どのようなかたちでギリシャ・ローマ古典を用いたのか。古典が多数翻訳・翻案された16-17世紀の詩人たちはどうか。本稿では、「心の安らぎ」(ataraxia)、「幸せな人」(beatus ille)、「今日の花を摘もう」(carpe diem)、「賢い人」(sapiens)など主要主題を中心に16-18世紀イギリスにおける古典の受容・援用・変奏のありかたを概観し、反ピューリタン言説から感受性の議論へという文学的・政治的・社会的土壌の変化を

明らかにしたい。18 世紀からとりあげるのは Pope, Gray, Smith, Greville らの予定である。

18 世紀英国における牧歌の変遷——ティテュルスからメリボエウス

海老澤 豊

テオクリスが創始し、ウェルギリウスが練磨した牧歌は、イタリアやフランスの詩人を経て、英国でもさまざまな花を咲かせた。田園で歌合戦や恋に明け暮れる羊飼いの歌う伝統的な牧歌は、ポープの古典風牧歌とフィリップスの英国風牧歌をめぐる牧歌論争を経て、ロンドンで上流婦人や詐欺師が歌う「都会風牧歌」、海浜や河畔で漁師や釣り人が歌う「漁夫牧歌」、アフリカや中東で奴隷や旅人が歌う「異国風牧歌」などに発展していく。ウェルギリウスの第 1 牧歌は、「神」の恩恵を受けて自由身分と安らかな暮らしを手に入れたティテュルスと、土地収用によって先祖伝来の田畑を奪われて異国へ流れていくメリボエウスの対話で構成される。18 世紀初頭の詩人たちは「心地よい場所」で恋歌を口ずさむ幸福なティテュルスに心を寄せていたが、18 世紀中葉から後半に活躍した詩人たちは、「不幸の予兆」を感じ取りながら過酷な運命に翻弄されるメリボエウスに共感するようになる。本発表では 18 世紀英国における牧歌の変質をたどるとともに、反牧歌の動きについても触れたい。

アメリカの叙事詩をめぐる——コネティカット・ウィッツを中心に

小泉 由美子

仮にアメリカの叙事詩の起点を求めるならば、Connecticut Wits の Timothy Dwight の *The Conquest of Canaan* (1785) や Joel Barlow の *The Columbiad* (1807) のうちに見出すのが順当だろう。Connecticut Wits とはイエール大学を磁場とした文学者集団であり、狭義には上記二人の他、John Trumbull, David Humphreys, Lemuel Hopkins の五人から成り、Milton の *Paradise Lost*, Dryden 訳の *Aeneid*, Pope 訳の *Iliad* を共に熟読し、Lord Kames の *Elements of Criticism* を共に学んでいた。冒頭二作の叙事詩が双方とも 1770 年代のイエール大学で着想されたことをふまえれば、この時期のこの場所には「アメリカの叙事詩」創出のための土壌が既に準備されていた可能性が浮かび上がる。本発表は、彼らに光をあてながら 18 世紀後半におけるアメリカの叙事詩の胚胎期 (1752-)、到達期 (1785-1788)、再考期 (1788-) を概観する。各時期の鍵作品として取り上げるのは、George Berkeley (1685-1753), “Verses on the Prospect of Planting Art and Learning in America” (1726/52), Dwight, *The Conquest of Canaan* (1785/88), Humphreys, *A Poem on the Death of General Washington* (1800/04) である。

18 世紀のオーガスタン時代の詩人たちと 19 世紀のロマン派時代の詩人たちは共通して紙幣や国債といった金融上の問題を取り上げている。17 世紀末に始まった財政・金融革命の産物であるこれらの制度に対する疑念は 18 世紀を通じて見られたが、18 世紀初頭と 19 世紀初頭という 100 年を隔てたそれぞれの時代の金融危機(南海泡沫事件とイングランド銀行兌換停止)を契機として社会問題となって前景化し、詩人たちに貨幣に関する詩句を書かせたのである。また詩人たちはしばしば造幣を詩作と重ね合せ、詩や詩人を貨幣として扱って、貨幣の真正さの問題を本物／偽物の詩という議論へと自意識的に転換した。本発表においては 18 世紀のスウィフト、ポーブラと 19 世紀のシェリー、ピーコックらの時事的な詩作品を取り上げて、そこで金融に関する興味・主題がどのように展開されているかを探り、オーガスタン時代の伝統がロマン派時代にどう受け継がれたのかを考えたい。

14:10-16:10 5 号館 3 階 5335 教室
【英語教育部門シンポジウム】

Curriculum Amendment in a University-Level English Language Program: Theory and Practice

(司会・指定討論者) Yuka Yamamoto, Associate Professor, Rikkyo University
(講師) Yukie Saito, Lecturer, Rikkyo University
(講師) Corazon Talam Kato, Lecturer, Chubu Gakuin University
(講師) Katsuya Yokomoto, Lecturer, Sophia University

English education has been reformed at various levels of educational settings in order to meet the demands of globalization in education, politics, and economy. One of the biggest changes will be the introduction of English as an official school subject for 5th and 6th graders in public elementary schools from 2020. English language education at universities is not an exception to significant changes. In fact, many universities have made substantial modifications to their language education curricula in recent times. However, curriculum amendment cannot be made without careful considerations, and the language teachers, as well as school administrators, encounter a number of issues at the designing, piloting, and implementing phases of curriculum amendment. Expecting possible issues at various phases of curriculum change facilitates the transformation of the curriculum. For this purpose, the theoretical and practical issues in relation to curriculum development and implementation will be explored using the case of a university that underwent major curriculum amendment in 2016.

Preliminary assessments and piloting for curriculum development

Yukie Saito

Curriculum design involves several different preliminary assessments. First, needs assessment including learners' levels and demands in the society and the school must be taken into consideration. Then, the evaluation of existing curriculum is crucial when determining what should be revised to improve the quality of education. In addition, assessment of newly developed or amended curriculum through piloting is an important part of curriculum development as issues always arise at the practical level even after thorough designing. Small-scale piloting can offer several practical suggestions which should be considered before the actual implementation of the new program. In this talk, the process of preliminary assessments will be discussed.

An additional component to existing curriculum

Corazon Talam Kato

Curriculum development usually involves revising the existing curriculum by replacing a course with a new course, adding a new course, and eliminating an existing course in the curriculum. Adding a new component to the existing curriculum requires careful considerations theoretically and practically. The theoretical background, as well as practical issues related to adding a new component to the existing curriculum, including assessing learners' needs, arranging time allocations, ensuring teacher availability, and conducting faculty development, will be discussed using a case of mandatory English education curriculum that recently added a reading component. Practical considerations will be given to facilitate the future curriculum amendment of similar language education programs.

Material selection and development for revised curriculum

Katsuya Yokomoto

As curriculum is amended, teaching materials must be developed or at least selected from published textbooks. Thorough analyses of the curriculum goals and objectives, as well as the textbooks themselves, are needed for this process. Among several means of choosing the materials, textbooks must be reviewed from several different perspectives depending on the curriculum needs. Also, development of in-house materials will be discussed, as none of the published materials available in the market meet all the pedagogical goals of any one curriculum without in-house supplementation. A case of material development at a university

will be introduced, and several practical suggestions will be given to tailoring the materials to meet the needs of the students and the curriculum.

16:20-17:50 5号館3階5336教室

【特別講演】

Lost in the Detail: Edgar Allan Poe's "Murders in the Rue Morgue"

(講師) D.A. Miller

John F. Hotchkis Professor Emeritus and Professor of the Graduate School
University of California, Berkeley

(司会) 東京大学教授 田尻 芳樹

Naomi Schor: "There is always the danger that to write *on* the detail is to become lost *in* it." And yet every one who acknowledges this truth will be drawn to a further observation: that though we all *do* get lost in the detail—and get lost all the time—you'd never know it from our reading practices. In these, at least by the time they appear in print, the alleged danger of absorption in the detail has always been successfully overcome in the name of Meaning, History, the Real. In my surrender to a single, but insistent detail in Poe's "Murders in the Rue Morgue," a detail I can neither ignore nor render into a serviceable interpretative takeaway, I try to convey an experience of what getting seriously lost in the detail might involve.

懇親会 (18:00-20:00)

会場

5号館地下食堂

会費 4,000円(学生2,000円)

事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

会場アクセスマップ



